

上宮田台遺跡補遺

安井 健一

1 はじめに

上宮田台遺跡は袖ヶ浦市に所在する遺跡で、首都圏中央連絡自動車道の建設に伴い平成14・15年度に調査が行われ、平成19年度と21年度に報告書が刊行された。筆者は整理作業の後半から担当し報告書の執筆・編集を行ったが、特に小さなピットの帰属など把握しきれず混乱を来した部分が多々あった。図の訂正が間に合わなかったものは可能な限り文中でその旨示しておいたが、残念ながら編集でも間に合わず誤植、掲載漏れなどのミスを残してしまった。時間が無かった、遺構や遺物が膨大であったなどという言い訳しても、誤植が訂正されるわけでもなく、掲載漏れの遺物が世に伝わるわけでもない。恥をさらすようのためらう気持ちもなかったのではないが、資料の重要性を鑑み今回補遺という形ではあるが訂正と追加掲載を行い、少しでも問題の解消を図ろうと考えた次第である。なお、上宮田台遺跡は旧石器時代から近世に至るまでの複合遺跡であるが、今回は平成21年度に刊行した旧石器・縄文時代編(安井 2010)を対象とする。文中「報告書」とあるのはこの報告書を示す。また、特に断り書きがない限り事実記載は旧石器・縄文時代に限定している。

まずは誤植と正しい記述を表に示しておく。そのほとんどが筆者ではなく調査補助員の皆様によりチェックされたものである。この事実のみならず本報告は調査補助員の皆様の献身的な御努力があってこそ完成に至ったものであり、深く感謝の意を表したいと思う。

2 縄文時代後晩期集落の概要

遺跡全体については報告書に掲載してあるので、ここではそのうち縄文時代後晩期の集落について簡単に触れておく。所在地は袖ヶ浦市羽雄で、小櫃川支流の檜水川東岸の標高60~70mの台地上に位置する。調査区は東西約280m、南北約70mと細長く、中央部の段成形を境に東側が西側より5m程度高くなっている。本文の中心となる後晩期の集落跡は東側調査区から検

出された。堀之内1式期から安行3a式期にかけての堅穴住居約80軒が東西約100m、南北約60mの環状を呈するように検出され、後期前葉を主体とする袋状土坑や後期後葉の地点貝層なども形成されている。晩期中葉になると台地中央がすり鉢状に削平され、その窪地の斜面に沿って堅穴住居約15軒や土壙墓が構築される。その後大量の遺物を含んだ包含層が後期以来の住居跡も含めた集落全域に堆積する。その包含層も単一ではなく、ローム粒子を多く含んだ褐色土が地山直上に堆積し、その上にいわゆる黒ボク土層と言われる黒色土が堆積している。いずれの土層からも縄文土器は多量に出土するが、上層の黒色土の一部は奈良・平安時代の堅穴住居跡を覆っていたほか、縄文土器に混ざって奈良・平安時代以降の遺物もまとまって出土した(安井 2008)。本来の意味での晩期包含層とは下層の褐色土層に限定されることを示している(註1)。また、下層の確認調査から関東ローム層をすり鉢状に削平している状況もよく観察でき、包含層にローム粒子を多く含むという状況と合わせて窪地の削平という行為をかなり具体的に示している。なお、包含層出土遺物のグリッドごとの出土傾向を調べた結果、後期の土器は主として北側の谷に集中し、晩期、特に中葉の遺物は窪地内に集中していることが判明した。窪地の形成と土砂の移動が晩期前葉から中葉にかけて行われたことを示している。これら数々の事実により、「中央窪地」の形成と動態を示す好事例であることは間違いないだろう。包含層の遺物は全体にまんべんなく散っていたのではなく、ある程度の疎密が認められた。整理に当たっては当初旧石器のブロック状の出土状況を想定し、それらを26の集中区に分けて分類した。次項で説明する土器は、この集中区から出土したものである。

出土遺物は多く発見届記載量はテンバコ1,500箱である。土器は言うまでもなく後期前葉から晩期中葉が主体であるが、晩期中葉の比率が高いことが特徴の一

つでもある。祭祀に関わるとされる遺物もまとまっております、120点余りの土偶を筆頭に、土版、有孔土製円盤、釣手土器、手燭形土器、イノシシ形土製品、石剣などが出土した（言うまでもなく、時期は晩期だけではない）。また、千葉県内の遺跡としては石器・礫類の出土が多いのも特徴で、利器への加工途上である状況を示すと思われる剥片石器類や、それ自体を利器であった可能性も指摘されている「石核」類など豊富に出土している。

なお、ここでは詳しく触れないが早期の集石遺構、中期後半の竈穴住居跡も検出されている。遺跡の西半分は中世の台地整形区画が存在するが、本来は西側にも縄文時代の遺構群が存在したとみられる。

3 追加掲載土器について

ここに掲載する土器は、実測を行っていたにもかかわらず台帳とのチェックを怠ったためトレースし忘れてしまったものである。校正もほぼ終わった段階で存在に気付いたものの、すでに時間的には追加が不可能な状況であったため、やむなく報告書への掲載を見送った。

第1図の1・2は中央窪地包含層の集中11出土である。図中の数字のうち、口縁脇は口径、底部脇は底径、中心線下は器高を示す。()は推定値、[]は現存値の意味である。以下、補足的な観察所見等を述べる。1は前浦式の鉢形土器である。遺物番号の次のカッコ内の数字は注記番号で、3は包含層の②層一括、6以下の数字は③層出土で地点を記録されていることを示す。口縁から底部まで残存しており、遺存度は30%程度である。胎土は密でスコリアが微量に混入する。内面は褐灰色、外面は灰褐色に発色する。器形は比較的小さな底部から広く椀型に立ち上がり、胴部ほぼ中央で屈曲して若干内傾した後口縁が反り返るように立ち上がる。胴部屈曲部に沈線で区画された縄文帯を貼り付け上下を分割し、上側は弧状沈線と逆「つ」の字文を組み合わせた意匠にLR単節縄文を充填する。口縁側の欠損が著しいがおそらく4単位であると考えられ、左右へ延びる縄文施文部はそのまま隣の逆「つ」の字文へつながると考えられる。口唇上には2個一組のいわゆるB突起が逆「つ」の字文の上に配され、口唇上の沈線はこの突起の裾を回り込む。内面には1条の沈線が巡る。底面に熱を受けた痕跡が認められるほか、外面の一部にはススが付着する。

2も前浦式の鉢形土器である。注記番号は3で、②

層一括出土である。口縁部から胴部中央付近まで残存する。口縁部の遺存度はおおよそ30%である。胎土は密であるものの細砂粒の混入が顕著でざらざらした印象である。内面はにぶい橙色、外面はにぶい黄橙色に発色するが、外面には黒斑が顕著にみられる。器形は底部を欠くものの、基本的には1と同様とみられる。ただし胴部の屈曲は緩やかになり、口縁部側の立ち上がりも1に比べ直線的である。文様構成も1に似るが、1で逆「つ」の字文が配された位置には入り組み三叉文が合体したようなモチーフが配され、口縁は緩やかな突起となる。これらの意匠は4単位構成をとるが、それぞれの単位の間には「つ」の字文とB突起が配されるのが興味深い。言うまでもなく「つ」の字文を左右反転させれば、1の土器の主単位を構成するモチーフと同一となる。なお、地文はLR単節縄文であるが、軸の太さが極端に違う縄を撚り合わせたものと考えられる。内面には2条の沈線が巡るが、その内上段側はB突起のところでは切れ、B突起に貫入するように折れ曲がる。全体に熱を受けており、内面にはススが付着する。

すでに型式名を記載はしたが、改めてこの2点の土器の位置づけについて若干触れておく。やや分かりにくい両者いずれも文様構成は姥山Ⅱ式的な縦位の単位文構成はとらず横帯化が完了しているとみられ、前浦式直前型式まで遡らない可能性が高い^(註2)。続く前浦1式は文様の横帯化とあわせて縄文地文に三叉文や「つ」の字文などを沈刻するいわゆる「彫刻的手法」を多用することが特徴とされる。両者の文様を画像として説明するにはこれで十分であり、ほぼこの段階に位置するものとみられる。次いで両者の前後関係であるが、器形や基本的な文様構成に大きな違いは認められず、それほど時期差は無いと思われる。しかし、それでも1に比べ2は器形が若干弛緩している点はすぐに認識できる。また2の三叉文は中を広く挟り取ってなぞるように調整しており、安行3c式に出現し安行3d式に顕著に認められる手法でもある。その一方で両者とも無文部は沈線で隔てられているのみで器壁は割と平坦であり、縄文施文部に粘土を貼り付けて無文部を一段低くする前浦2式に特徴的な「磨消的手法」^(註3)は徹底されていない（ただし、胴屈曲部隆帯にその兆候は見てとれる）。前浦2式ではこうした「磨消的手法」による縄文帯と「つ」の字文を基にしたモチーフが平行化、多段化したり執拗に反復されたり描線が鋭角化したりする状況が認められ、安行3d式に見ら

れる沈線の重層化や鋭角化に対応した状況と思われるが、今回の2点はそこまでは至っていないとみるべきであろう。こうした点からこれらの土器はいずれも前浦1式に位置し、1→2という変遷は認められるものの前浦2式まで至っていないと考えられる^(註4)。晩期安行式で言うならば、安行3c式の新段階から安行3d式の前段階に位置付けるのが妥当であろう。なお、1の胎土や調整が安行3b式や姥山Ⅱ式に近いのに対し、2のそれは前浦2式に特徴的な舟形棒状文の深鉢あるいは同時期と思われる無文の深鉢に近似しており、胎土の選択性がすでに生じている可能性もある。とは言うものの、そもそも上宮田台遺跡の晩期土器群の検討そのものがまだ手つかずの状態であり、そうした中で個別の土器を取り上げて分かったような議論をするのは時期尚早である。筆者の今後の宿題としておきたいと思う。

4 SI214住居跡についての補足

SI214住居跡は当遺跡で検出された縄文時代竪穴住居跡の最後の番号を付けて報告したものであるが、縄文集落の調査はここから手がつけられたことが分かっている。この奇妙な事態のいきさつについては（自分が理解できる範囲で）報告書に記載したが、住居と認定するにあたって行った作業については簡単な文章で済ませてしまったので、ここで補足しておく。

手元に残された現場図面は「包含層の下から検出された大小様々なピットを特段の方策も認定作業もなく掘って実測された」と思われる図であり、正直見ただけでは何を描いたものか全く判断できないような代物であった。そこで、径・深さとも10cm以下のものあるいは形状が不整形で、明らかに人為的でないと思われるものを除外したピットを抽出した。それが第2図の基となった報告書の第140図である。これでも他の住居跡と比べてまだ不要なピットが残っているように見える。ただしこれはこの住居跡の時期が後期中葉である可能性が強いと判断され、その時期は建て替えの痕跡がよく残されることや、出入り口施設が存在する可能性が強いことを考慮して残したものである。なお、図中には途中でプランのラインが消えているピットもあるが、これは原図がそうになっていたものである。よくありがちな（そしてもちろん容認されるべきでない）事態であるが、包含層のセクションベルトを残して遺構の実測を行い、後でベルトを除去した際、その下から検出された遺構の実測をし忘れたものと想像され

る。挿図作成に当たっては当然なるべく復元するよう努めたが、見たことがない遺構の図を想像だけで復元するにも限度がある。下手すると「捏造」と変わらない作業になってしまうため、無理な復元は行わなかった。

そのようにして残されたピットの深さを調べた結果が第2図である^(註5)。ピットの深さに応じてトーンを掛けた状態で、トーンなしが30cm未満、薄いトーンが30cm～49cm、中間のトーンが50cm～69cm、濃いトーンが70cm以上の深さであることを示す。中央部に明らかに径が大きく深い主柱穴と思われるピットが検出されたため、それらを中心として南北少なくとも2軒の竪穴住居跡が存在するとみなした。結線してあるピットは主柱穴と推定したものである。

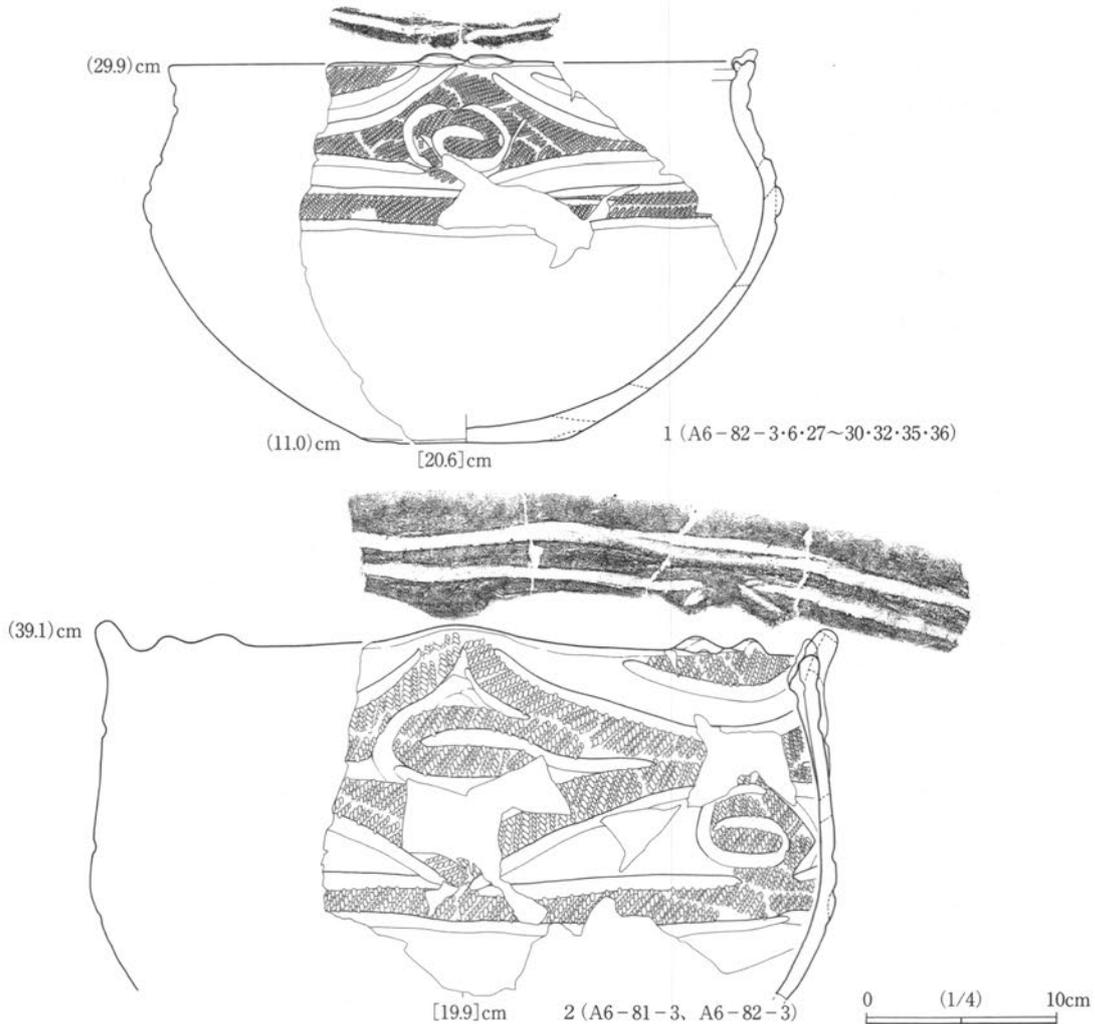
北側の住居は東西約8m、南北約7mの楕円形プランに復元したが、小ピットの配置を見ると隅丸長方形となる可能性もある。主柱穴と思われるピットは4基検出された。北西のピットを除いてやや浅いが配置や径から主柱穴と判断した。壁際には径・深さとも30cmを超すピットが2～3m間隔で並んでいる。中央部B6-80・81グリッド付近にピットが密集するが、出入り口施設にあたるものか。ただし主柱穴の配置からは東ないし西側に出入り口がある方が自然に思われる。

南側の住居は直径約10mの円形プランに復元した^(註6)。B6-91・92、C6-01・02グリッド付近のピットが出入り口となる可能性があるが、先述したとおりセクションベルトにかかった部分は実測が不十分なのが惜しい。主柱穴は4本検出され、いずれも径・深さとも50cmを超す。なお、東側主柱穴のすぐ東には同規模のピットが2基存在するのが確認できる。仮に建て替えがあったとすればこちらを主柱穴とするプランも想定できようし、あるいは6本柱の建物であった可能性も指摘できよう。壁際には径・深さとも30cmを超すピットが2～3m間隔で柱穴が巡るほか、壁と主柱穴の間にも同様のピットが相当数存在する。

住居の時期を判断するに当たり立ちはだかった難問が言うまでもなく晩期中葉の窪地造成（＝削平）であり、これによって竪穴の覆土が根こそぎ削り取られたため当該期の遺物がほとんど残存していないという事実であった。南側住居のピットからは加曽利B2～B3式の土器が出土しており、時期判断の材料とはなる。ただしそれだけではなく、住居の形態そのものから時期をある程度判断する必要もあることは言うまでもな

表 上宮田台遺跡2正誤一覧

頁	行・位置	誤	正
挿図目次7枚目	右24	晩期～前葉以降	晩期前葉以降
写真図版目次2枚目	左11	ビット出土土器	ビット出土土器、SZ001出土土器
17	上から9段目右から2列目	縄（早前）	縄土（早前）
17	上から37段目右から2列目	縄（早中後）76点	縄土（早中後）76点
35	11	長軸長	主軸長
35	12	短軸長	横軸長
35	16	直径	長径
71	SI032ビット計測表P8備考欄	SH2093	SH0293
71	9	遺物で一部	遺物を一部
71	SI033ビット計測表P21備考欄	SH3091	SH0391
86	19	新旧不明	新旧不明。
131	1	SI068（第102図、図版43）	SI068（第102図、図版43・63）
167	6	C-04-06・14	C5-04-06・14
173	右上	(SD008)	削除
183	18	径190cm	直径190cm
192	26	(第155・164図・65)	(第155・164図、図版65)
439	左下から2番目の土偶の番号	欠落	11（集中4）
459	一番右下の土器の番号	30（A6-51）	33（A6-51）
462	12	SH971	SH0971
473	16	30ヶ月以降ものが	30ヶ月以降のものが
522	上から26段目右から3列目	LP単	LR単
525	上から18段目右から3列目	LP単	LR単
525	上から23段目右から3列目	LP単	LR単
525	上から46段目右から3列目	PL単	RL単



第1図 追加掲載土器実測図

い。

関東地方の縄文時代竪穴住居跡を系統的に分析した研究によると(菅谷 2004)、後期前葉には一般に「柄鏡型住居」と呼ばれる、支柱穴を持たず円形プランに出入り口施設と思われる張り出しを持った住居が汎関東的に分布する(猿田式住居^(註7))。西関東ではこれらが方形プランへ変容していく状況が看守されるが(港北Ⅰ式住居)、東関東では堀之内Ⅱ式~加曾利BⅠ式期に「柄鏡型住居」の系統は一旦途絶え、代わりに加曾利BⅡ~BⅢ式期にやや大きい直径10m程度の円形プランと比較的間隔の狭い4ないし5本の支柱穴をもつ住居が出現する(祇園原Ⅰ式住居)。曾谷式期に至ると平面形状が「D」字形に変化し(祇園原Ⅱ式住居)、後期安行期には西関東で続いてきた平面方形プラン住居(港北Ⅱ式住居)が東関東でも主体となるという。上宮田台遺跡においては明確なプランが分かる住居は多いとは言えないが、それでも上記の編年におおむね沿った形で住居の変遷が確認されており、菅谷氏が示した変遷も適用できると思われる。SI214住居の時期について、先にピット出土遺物から加曾利BⅡ~BⅢ式である可能性を指摘したが、住居形態もおおむね祇園原Ⅰ式の範疇で理解できると思われる。

5 おわりに

最初に述べたとおり本稿は正誤表と追加資料の掲載および本報告で説明が不足していた点の補足が目的であり、上宮田台遺跡の分析・研究といったレベルに到底達しているものではない。筆者は調査に一切携わっていなかったので正直整理作業は荷が重かったし、最後はかなり突貫工事となってしまったので考察らしき考察もできず、それどころか本稿で挙げたようなみつももない失敗を犯してしまった。とは言うものの、資料の量・質ともに東関東の縄文時代後・晩期を研究する上で看過できない内容を持っているのは間違いなく、とりあえず報告を行った者としての責任は果たす必要があるかと思う。今後の課題として取り組みたいと思う。

謝辞

本論をまとめる上で下記の方々にお世話になった。記して謝意を表します。

千葉縄文研究会、上守秀明(敬称略)

註

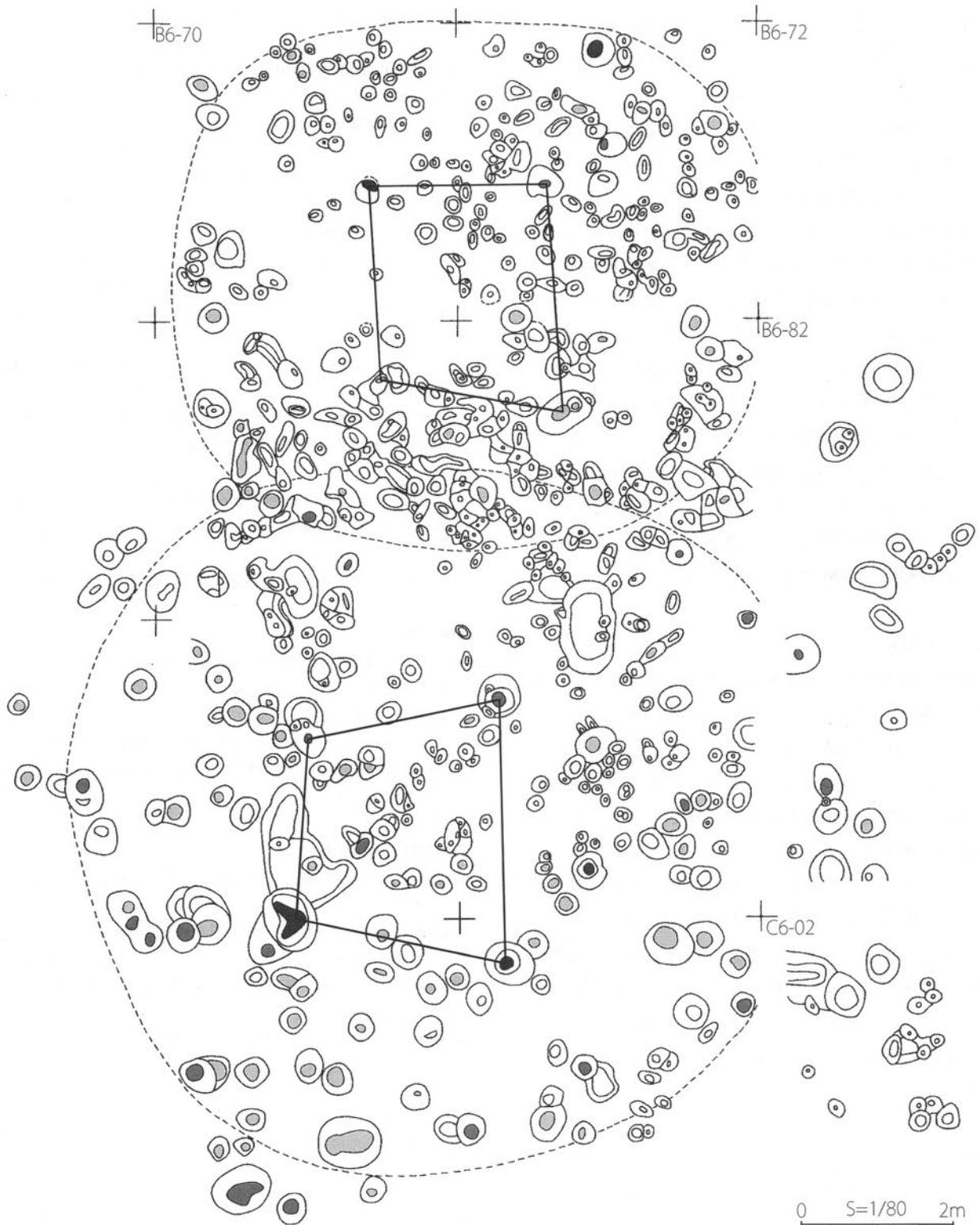
- 1) 調査時及び報告書では地山直上の褐色土を③層、その上の黒色土を②層と表記している。本文でもそのように表記する。
- 2) 前浦式土器研究の先駆者とも言うべき鷹野光行氏は前浦式直前型式を事実上前浦Ⅰ式に統合する編年案を提示しているが(鷹野 1978)、姥山Ⅱ式由来の縦位構成の文様が横帯化する過程を示す資料が最近増えており、前浦式直前型式はここで言う前浦Ⅰ式とは区別されるべきと考える。
- 3) 「彫刻的手法」「磨消的手法」は鷹野氏が用いた表現であるが、あまり適切な表現とは言えないように思われる。鷹野氏の用法は図像表現を説明することを意図したと思われるが、一般的にはいずれも技法を表す言葉として理解されよう。特に「磨消的手法」を技法と切り離して説明するのは相当に困難な作業であろうと想像される。
- 4) ちなみに集中Ⅺから出土している土器は、姥山Ⅱ式、前浦式直前型式、前浦式、安行3c式、大洞CⅠ式、いわゆる杉田Ⅱ式など多様で、傾向を示すのは難しい。より純粋な包含層に近い③層出土土器は、姥山Ⅱ式と安行3c式が主体であるように見える。
- 5) なお、炉が未検出であるが(このピット群が調査時住居跡と認定されなかったのはそれが理由かもしれない)、前項で述べたとおり晩期中葉にこの遺構を含めた環状集落の中央部が削平されており、その際炉も含め削られたものと考えられる。
- 6) 本報告では「D」字形になる可能性を指摘したが、検出されたピットを見る限り円形プランに比べ可能性は低そうである。
- 7) 住居の型式名は、(菅谷通保 2004)に従った。

引用文献

- 安井健一 2008『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書8—袖ヶ浦市上宮田台遺跡1(弥生時代以降)—』(財)千葉県教育振興財団
- 安井健一 2010『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書10—袖ヶ浦市上宮田台遺跡2(旧石器・縄文時代)—』(財)千葉県教育振興財団

参考文献(上記以外)

- 鷹野光行 1978「前浦式土器の研究」『考古学雑誌64-3』日本考古学会
- 菅谷通保 2004「竪穴住居」『千葉県の歴史 資料編 考古4(遺跡・遺構・遺物)』千葉県
- 縄文セミナーの会編 2004a『第17回縄文セミナー 晩期中葉の再検討』縄文セミナーの会
- 縄文セミナーの会編 2004b『第17回縄文セミナー 晩期中葉の再検討—記録集—』縄文セミナーの会



柱穴の深さの凡例 ● 30~49cm、 ● 50~69cm、 ● 70cm以上

第2図 SI214平面図と柱穴深度 (安井 2010の第140図に加筆)